



創業者 富田久三郎

くろもじの花

明治の化学者富田久三郎の日々

くろもじの花

刈取りが済んだ田んぼや畔には人だかりができ、風に乗って祭囃子が聞こえてくる。文久元年（一八六一）三河の国三州田原藩の田んぼの一角には小山が築かれ、その傍に初老の男が一人立っていた。

男は名を富田保五郎といった。五十五歳とはいえ上背があり体軀ががっちりしている。眼光鋭く顎髭には少しばかり白いものが光っている。

「今からあの小山をぶっ飛ばしてみせる。見物衆は後ろへ下がれ」

保五郎は大きな声で叫び、手に提げた筒状の物体を披露した。筒には爆薬が詰められ数本をひとつに括つてある。もう片方には取っ手のついた木箱を抱いていた。

弟子は後ずさりし始めた観衆を尻目に、保五郎から受け取った爆薬を大事そうに抱えて小山の方へ小走りで向かっていく。爆薬の先からは一本の導線が覗き、保五郎の足元の木箱に繋がっていた。

「準備が整いました」

弟子の遙かな声が保五郎の耳に届いた。

「それでは始める。見事に破裂させるぞ、ご覧あれ」

一呼吸おいて保五郎は木箱の取手を静かに回した。

爆音とともに土埃が高く舞い上がり、小山は一瞬にして木っ端微塵となった。

祭囃子の音が戻り観衆のどよめきが去ると、入れ替わるように役人、捕吏数人が一斉に田んぼを横切り保五郎らに駆け寄ってきた。

「御用だあ、神妙にせよ」

「わしは何も悪いことはしていない。藩のため火術の実験をしていただけだ」

と保五郎は抗議するが、捕り方は有無を言わず、代官所まで連行していった。

「お前らのしたことは、異教徒の邪法を用いたもので許しがたい」

と代官は目くじらを立てて裁く。

「お代官様、私は国禁を犯すことなど何ひとつしていません」

「弁解を申すな。ではどうやって爆破させたのだ」

「そもそもキリシタンの布教のために用いる魔術などではなく、私がエレキテルを使って爆破させました。あの木箱は発火装置です」

「エレキテルだと、お前にそれが作れるのか。だが、民衆の面前で怪しげな興行を行うことは許しがたい」

代官はそれだけ云うと保五郎らを投獄してしまった。

弟子はすぐにも放免され、自分だけが獄中生活を続けることになるが、考えることは爆破実験のことばかりだ。

数日後、久三郎は

「筆と硯を貸してくれ。ついでに紙も欲しい」

控えめな口調でと牢番に訴えたところ、一式を揃えて牢内へ差し入れてくれた。毎日、保五郎の書き物は続き十五日目の朝、突然牢番から出るとの指示があり白州へ座らされた。

「富田保五郎、拘留十五日間は長かったか。その間にお前が書いていたものを見せてみる」
役人が保五郎の書き上げた巻紙を代官に渡した。

「なるほどのう、見事に画を含めて書き留めてある。やはり火術家であつたか」
代官は巻紙を捲りながら話を続けた。

「保五郎、実はお前の素性を確認していたところ尾州名古屋藩の火術顧問であつたことから、藩同士の仲裁をこの間にしておつたのじゃ。ちと十五日間は長かつたかもしれない。だが、お前の書付は名古屋藩家老も納得するだろう。よつて本日で放免である」

と沙汰され、保五郎は獄中から十五日ぶり自宅に生還した。

自宅で静養していると、今回の事件が思わぬ形で保五郎に影響してきた。行なつた罪より保五郎のエレキテルの知識が買われ、この仕掛けの注文が舞い込んできた。だがこの地では道具も揃わず量産もできんと判断して、市野村の実家へ帰ることを決断した。

保五郎の家は姫街道に面し、長上郡市野村で代々鋳職を兼ね鍛冶職を営んでいる。鋳職（かざりしよく）とは鋳屋のことで鎖、かんざし、煙管、家具の金飾りを作り販売している。そんな家業を保五郎は婿養子に譲り、自分だけが田原藩から年三人扶持を受けて居住していたのだが、今回の事件で戻つて来た。保五郎には生業意外に鉄砲作りの技もあるので田原藩では火術家でも名が通つていた。

若い頃に長崎で学んだと言われるほど西洋の新知識を持ち得ている。家業の傍ら最も多く製造していたのは火薬、発火具、雷銀などである。発火具の発案は尾州藩の藩医であるが、雷銀は讃岐の国の馬宿の住人が西洋学に学び発明し、鉄砲の発火機の改良をしていた。それを知つた保五郎はそれに続けと火薬の材料となる硝酸、硫酸、硝石を、さらに炭酸マグネシウム、硫酸マグネシウム、硫酸ソーダなどを作つていた。当時はこういうことをやる人間を

「製薬家」とか「薬剤師」などとは呼ばれずに「火術家」と呼んでいた。

この影響を受けたのが孫の久三郎である。ちなみに久三郎が祖父を見習い、聞きかじりで学んだ知識によって、炭酸マグネシウムを製造したのは六年後のことであった。

嘉永五年（一八五二）二月二十二日久三郎は富田保五郎の長女ゆきと養子勘七との間に長上郡市野村に長男として誕生した。

父勘七は家業を継いでいるが、祖父とは違って根っからの勉強好き、特に蘭学には精通しており、近所の住人の病氣治療もしてやっている。だが家業の傍ら火術に関する研究などは一切しない。真面目に鋳職と鍛冶に専念していた。

ところが生まれた久三郎は祖父のすることに関心があり、幼い頃から見様見真似で手伝いをしていた。祖父が田原藩で獄に入った話は、久三郎が十歳の時で聞いても理解できずにいたが、後に衝撃的な出来事として記憶し、祖父の行動に興味が惹かれていった。

父勘七は久三郎に学問を教えるのが得意で、十六歳ころの久三郎は蘭学や家業を習得していた。

「じい様はすごい人ですね」

父の教授で蘭学を受けているとき、たまに西洋の薬学に触れると久三郎は保五郎を尊敬する口調で返事をした。それを見た母ゆきが将来を不安げにしているようであった。

慶応三年（一八六七）暑い盛りに、ええじゃないかと踊り狂う一群が毎日次々と村を通過していく。穏やかだった村の街道は一段と騒々しくなってきた。久三郎は何かが起こる前兆なのかと興味深く見つめていると、勘七が苦り切った顔で一言呟いた。

「久三郎、今に世の中がひっくり返るようになるぞ」

久三郎は父の言葉の意味が、まだ理解できなかった。

翌年一月、保五郎とともに久三郎は戊辰の役に従軍する。保五郎が鉄砲作りや火術に精通しているところから特に藩から目をつけられ従軍を命ぜられたのである。

所属は官軍の東山道征東軍尾張藩付家老・犬山城主のもとで、信州塩尻に出征し戦った。この時保五郎は六十五歳、久三郎は十七歳であった。

「子供を戦争に駆り出すなんてひどい」

ゆきは怒って泣いていた。保五郎は弁解して

「わしは藩の火術専門家だから従軍して戦うわけじゃない。手ほどきに行くのだ。久三郎にはその手伝いを担って貰うだけだ」

と云ったものの、今度は久三郎が疑問を投げかけてくる。

「じい様、わしら人を殺してもいいのですか。尾州藩は官軍に属しているのに実家の静岡は幕府軍ではありませんか。同じ村の人間が敵同士になってしまう」

「お前の言うことはよくわかる。静岡各藩は新政府軍の東征に困惑していただろう。尾州藩はいち早く官軍としていくとしたため、静岡各藩は大勢に順応して官軍側に帰属したようじゃ。心配するな。」

戦争は殺すか殺されるかのどちらかだ。だが、わしらは勝つために武器を備えることじゃ。直接、人を殺すわけではない。お前はわしの手伝いをすればいいだけだ。命を粗末にするではない」

保五郎は命を粗末にするなど云う。久三郎には納得できない。幕府軍の火砲が官軍よりも優れていれば殺されてしまう。じい様の云うことに疑念を抱いた。

「久三郎よ、何を迷っている。もう戦況ははつきりしている。戦わずとも信州は勝ち戦であろう。わしの作った鉄砲は勝ちに相応しい武器だぞ」

この会話を聞いていたゆきは、ただオロオロするばかりで言葉も出なかった。

この年、二人が従軍後、戦況が市野村にも届いてきた。新政府軍の勢力は武器が揃っており兵の数も相当である。幕府軍は逃げるのが精いっぱいであった。

三月五日には官軍は駿府城に入城して大総督府を設置し、四月八日まで駐屯した。十一日には江戸城無血開城、続いて上野彰義隊との戦いを経て、慶応四年は同年九月八日明治と改元された。保五郎と久三郎は同年六月に甲信両国の戦いから帰ってきた。

保五郎と久三郎が官軍として従軍したころ、村ではとんでもない紛争が生じていた。

村の旧幕臣市野内匠と大庄屋大村立左衛門との間で紛争が起こった。

当時村には市野家と大村家という二大勢力があり、いずれも地元で名家を誇っていた。

同年五月、天竜川の洪水で地域の農民たちは、これまでの風水害、大地震等でたびたび飢饉にさらされ凶作となり、米価も高騰し疲弊していた。既に百姓一揆や打ち壊しが起きていて、それに危惧した市野家が、年貢米の減免を時の代官所大村家に進言した。ところが代官の大村家は市野家を浜松藩庁へ訴えてしまった。

浜松藩は一村の減免を許すと、他村への波及は必至とみて市野家の主張を認めなかったのである。

八月二十八日官軍の捕方が市野家当主市野内匠を連行すると、市野家に同情し味方する村民や百姓たちが、阻止のため実力行使に及んだ。この日、富田家には祖父保五郎と久三郎が従軍を終えて自宅に戻っていた。

早暁とはいえ夏の暑さに各家の者は起き出している。

「久三郎いくぞ。わしに続け」

市野家の方角で騒然たる物音がするので、二人は鉄砲を引っ提げて飛び出し街道を南に向かつて走っていくと、行く手に市野家の家族を捕縛した藩兵を見かけた。この中には市野内匠はいないが、家族七人を縛り引き揚げてきたようである。

これを見た村民が大きな声で叫んでいる。

「家族全員解放せよ。解放せよ」

と何度叫んでも知らぬ存ぜずの藩兵たちに、号を煮やした祖父は

「久三郎、脅しに撃ってやれ」

久三郎は銃を腰だめしで構えると、最後尾の捕吏に狙い定める。

銃は手製の鳩撃ち鉄砲で、距離は十間程度のところ。

「ダダアーン」

一発目は最後尾の捕吏の胸に命中。続く二発目はその前をいく捕吏の腕をかすった。二人は従軍のときの緊張感が呼び戻された。

「相手が即死だとまづいな。家には帰れないぞ」

保五郎が久三郎の顔を見つめて不安そうに云った。

「ひとまず岡野の家へ隠れるか。着いてこい、久三郎」

岡野平三郎宅ではすでに様子を察したらしく

「久三郎、急いでこれを着て逃げろや」

岡野は二人分の衣類と菅笠を持ってきて差し出した。保五郎と久三郎は百姓姿に変身し

「すまん、岡野、結果は見てのとおりだ。これからしばらくの間逃げにやなるめえ」
「いいってことよ。ここは落ち延びて時を待つしかないだろう」

旅費と握り飯を用意してくれていた。

二人は手に鋏を持ち、籠を担いで村のはずれまで来ると、集まった村の衆とともに酒を酌み交わし別れを惜しんだ。

「久三郎、あんたらは悪かない。悪いのは藩の奴らと大村家だ。わしらの気持ちを理解してもくれん」

村衆の中の長老が二人に向かって慰めてくれた。日が暮れるのを待ち、いったん自宅へ引き返した。叔父の升二郎が来ていて、家族一同が無事であることを喜び合った。

「いつまでもこうしてはられない。今回の事件にかかわったと思われる者はひとまず村を出る」

保五郎はいつしか今回の事件の処理で陣頭指揮を執っている。

「わしと久三郎、升次郎、河内佐内、横田の五名はまずは信州へ逃げる。その後のことは秋葉山に着いたところで決めよう」

その日の夕刻前には全員無事に秋葉山へ辿り着き、掛川へと下る二人を見送った。残る身内の三人とは森町の大日山まで逃れた。

常に行動するのは夜のため、途中で叔父の姿を見失い困惑したが事前に次の逗留場所をお互いで確認しておいたので長篠の「藤源」という宿で再開できた。

これより先は名古屋方面へ向かうという。知り合いの旅館に潜伏し、事件解決まで隠れることにした。

一方富田の自宅では、残された両親が今後のことを話しあっていた。

「わしらは家業を継いで生業に精を出している。今回の出来事は何も関与していないので、代官から問われても知らぬと言うしかない。うちの職人たちにも動揺しないように説明しておこう」

勘七はゆきに言い含めていた。事実、事の成り行きの詳細を知るものは誰もいない。事件の起こった原因だけは、村民の藩主のやり口に非があることへの反発だと共通していた。

徳川幕府の封建政治から明治の新政へ、日本が大きく転換を遂げようとする時期である。

久三郎にとって、自分だけの問題ではなく十七歳という多感な年代に遭遇した事件であった。やがて時が来れば解決してくれるだろうと勘七は世情の動きに理解を示していた。

ゆきは、その夜、久三郎の使った鉄砲を持ち出して、人目を忍び自宅近くの小川の底にそっと埋めた。

慶応四年は九月八日「明治」と改元された。五月には浜松藩が遠江の国三藩、駿河国三藩、両国の旗本直轄領とともに統合されて府中藩となり、翌明治二年六月に静岡藩と改めた。市野騒動のその後の結末はいったいどうなるのか、勘七は気にしていた。だが、思い描いたとおりに世情は動いていた。交渉相手は静岡藩が主となり、尾張藩と交渉する。明治三年になり静岡藩の山岡鉄舟の裁断で解決をみた。

久三郎たちは何ら罪科を受けることなく白日青天の身となった。

名古屋へ逃れた久三郎は祖父の伝手を頼って蘭方医鈴木弘斉に師事して薬学・製薬理化学・医学・蘭学等を修めていた。

その傍ら祖父の助手をつとめ金銀分析、電気メッキ法などを創案する祖父の手伝いをした。これが当たり二人の名古屋滞在の十分な資金となった。久三郎は祖父のやることを為すことが、これまで吸収してきた西洋知識を実践していることに畏敬の念を抱いていた。名古屋に来て早二年の歳月が過ぎた。

十九歳になった久三郎は祖父とともに市野村に帰郷する。

村がこれまで学んできた知識の実践場である。祖父から教えられた製薬技術をさらに飛躍させるため研究を行ない、高価な炭酸マグネシウムを安価で量産できないかと思いついた。これが実現できれば生きる糧になり世の為にもなる。

炭酸マグネシウムはマグネシウムの炭酸塩のことで、天然ものには苦土鉱、白雲石等として産出し、白色の結晶性の粉末で無味無臭である。用途は医療上の制酸剤、緩下剤いわゆる便秘薬として、他に散布剤、歯磨き粉の材料などになるものである。

炭酸マグネシウムの特徴は、比重が軽いので容積が大きくなり運送に多額の経費を要するため高価であった。当時は輸入に頼らなければならなかった。

「どうすれば、国内で良質のものを安価で多量に生産できるか」
久三郎は日々模索していた。やがて順を追って解いていく。

炭酸マグネシウムを作るためには苦汁（にがり）が必要である。苦汁はどうやって手に入るのか、苦汁は製塩の副産物であるからして製塩地を探し確保することだ。他には炭酸ソーダ（ソーダ灰）を必要とする。これはわが国にはないので代用品をどうするか。市野では名古屋で学んだ知識を生かし炭酸マグネシウム製造に必要な化合釜・乾燥室・洗浄器・濾過機・造形箱・風送室・溶解鍋などの各種機械器具や装置を工夫し発明した。その装置を活用

し煙草の茎からソーダ灰の代替品を作り出した。

「残るは苦汁を取り出す製塩地を探すことだ。どこが一番近いか。市野からは遠州灘か浜名湖しかない。遠州灘は海が近いけど製塩には向いていない。やはり浜名湖か」

早速、製塩地を探す。同時に製塩の副産物である苦汁を原料とする製法の本格的な研究も忘れなかった。

「いかん、最も大切なことを一つ忘れていた。今は生業で稼いだ金の一部を研究と活動費に使っているが、このままでは資金力不足で自滅してしまう」。

思い立ったら行動は素早かった。久三郎は二十歳になるかならんかの成長盛りの若者であった。

明治四年（一八七八）十二月に市野村から浜名湖の気賀へと足を運んだ。村から、およそ五里の道のりだが遠路も厭わない。

塩田を興して苦汁を得ることを考えるとこの地方独特の空っ風が吹いても気賀の海岸なら申し分ないとわかった。

予定していた海岸踏査を終え、ほっと一息して振り返ると浜名湖をぐるりと北から西へ取り巻く山並みが気に懸かった。

「来たついでに、あの雑樹林でも立ち入ってみるか」
ひとり気を吐いて、気賀の街道筋に向かう。

気賀の本陣の手前に神社を見つけ峠を指す。幸い踏み跡があり辿って登っていく。そのうち、目の前の巨木に気が付かず、思い切り頭をぶつけてしまった。それは樹幹の太い「大

葉樫「いわゆる「バクチ」の木がすつくと聳えていた。久三郎の知識ではこの木から咳止め薬の「ローリルケルス水」と「ローリル油」を取り出せると思った。すでに名古屋方面では関心があり実現を待つばかりであった。久三郎はこの木なら売れる薬ができると気を良くした。

峠は低木ばかりでしかも落葉しているから、南を望めば遙か太平洋の海岸線まで望めた。しばらく久三郎は傍の木に寄りかかり休息した。だが背中 of 居心地がよくない。それに頭上には伸びた枝が覆い、体を離れた瞬間に頭で折ってしまった。

すると枝から、かぐわしい匂いが鼻についた。

「おお、これは黒文字の香りだ」

黒文字の木は、主に東北地方の太平洋側から九州北部の山地の落葉樹林内に生えている。低木ながらも5mに達するものもあり、直径は十センチ程度にまで成長する。

目の前の樹皮は灰褐色でなめらかだ。しかも丸い皮目もある。だが十二月ではもはや花も実もない。春には淡黄色の花が多数咲き秋には黒い実となるのである。

足元の落葉を取り払いつつ、枯れ落ちた実を探し始めた。

「あった。あったぞ、黒文字の実が。この木があればできる」

幹の色や文様は黒文字の特徴そのものである。この黒文字の木から揮発油を抽出すれば香油として販売できる。

黒文字の香油は既に出回っていたが、手に入れるのは困難で市場では高価であった。これさえうまく製品化できれば、研究費にも生活費にも充分助かることになると思った。当時これらの製品は比較的高価であったので、二週間製造するとゆうに一年分の生活費が得られた

という。

この日の調査で、樹木の成分を分析利用して製品化すれば、炭酸マグネシウムを製造する研究の資金力になると確信した。

「今日は収穫があった。春になったら黒文字の花を見に来よう」

と心に決めた。それにしても思いがけない出会いとなった。塩田踏査は苦汁を得る最適地として気賀の海岸が確認できた。

そのうえ資金力となる副業まで見つけることができたのである。

村へ戻ってからは、見本に採ってきた樹木からエキスを取り出してみたところ、申し分のない成果であった。

暮れも押し迫り家業も多忙を極めた。それでも家業を父らに任せて再び気賀の山中を目指していた。

大葉樫から咳止め薬を作り出すことは容易であった。さらに黒文字の木から揮発油を抽出し、「黒文字油」と名付け香油の原料として年明けには製造販売する目途がついた。来年三月には気賀へ移り住み本格的に着手しようと思った。

ある日、市野では勘七とゆきが祖父を交え話している。

「じいさま、久三郎が今年で二十一になるが、これから一人で気賀に住むというので嫁をもらってはどう思っているのだが、どうだろうか」

勘七はさらっと言った。

「わしは予てから嫁を探していたが当事者同士が気に入るかどうかがだが」
「こりゃあ考えが一致したなあ。ゆき、お前は思う」

「私も賛成です。じい様の言うとおりに、あの子には今が一番大事な時ですから」
祖父の尽力で嫁とりの話ほとんどん拍子に進み、明治五年十二月には長上郡内野村の大村
為吉の長女きぬ、当年十六歳と結ばれて気賀に移り住んだ。

三年後きぬは長男鷹吉を出生した。新年早々の慶事に富田家は歓喜に湧き、祖父の保五郎
が一番喜んでいた。

久三郎の気賀での商売は、専ら順調に推移していたが、気賀の海岸に建てられた工場での
苦汁づくりだけは予定どおりに進行していなかった。

さらに量産を目指すにはどうすればいいのか日々悩む毎日であった。

久三郎が気賀へ移り住んだ理由は、遠州で唯一の製塩地である敷知郡宇布見村に近くて苦
汁入手に便利なことであり、知人の東京在住の薬業家・森嶋松兵衛氏の助言によって確信が
あったからだ。

遠州地方の地形を見ると、市野・気賀・宇布見はちょうど正三角形の各点の位置にあたる
。各点はいずれも十数キロの距離にあり、どこから移動しても同じ距離である。

しかも、そこには浜名湖という天然の輸送路があり、まさにコスト面でも安上がりという
ゆえんであった。

気賀に住み寝食忘れて研究開発をしてきたが、出来上がった炭酸マグネシウムの質は思っ
た程の出来ではなかった。

「これでは商品にならない」
何度も試みて販売してみたが、市場では歓迎されなかった。

明治十年（一八七七）一月、久三郎は炭酸マグネシウム製造の新たな方法を研究しようとして名古屋で学ぶ。今度も祖父保五郎の伝手を頼って理学博士伊藤圭介門下のところで「化学・物理」を習得する。伊藤圭介本人はすでに明治政府に仕え東京に住んでいたが、世話をしてくれた門下生は何くれと援助を惜しまなかった。

炭酸マグネシウムを作るには原料である粗製硫酸マグネシウムが必要なのだが、と訊ねたところ大阪の間屋を通せばいいと教えてくれた。久三郎は大阪まで遠回りして帰ろうと考えた。

ある一軒の間屋の暖簾をくぐった。

「粗製硫酸マグネシウムの取引はできますか」

「そりやできますとも、いかほどでも」

というので早速価格を聞いてみると、やはり高い。名古屋の門下生が云ったとおり、取引しても間屋に高い口銭を取られ、採算が合わなくなってしまう。

「原料はどこから手に入れるのですか。できれば製造業者を教えてくださいませんか」

とも聞いてみた。人がよさそうな手代は奥へ引っ込み台帳をもって戻ってきた。当時、粗製硫酸マグネシウムとして販売している業者は少ない。よって台帳に記載された取引業者は二軒だけ、そのうち一軒はしつかり頭の中に叩き込んだ。

気賀の暮らしを顧みず二か月の短期間名古屋で学んで帰郷した。新たに学んだ学理をも実地に応用した。

この時の製法は原料である粗製硫酸マグネシウム（苦汁の結晶した通称ツボガリを精製したもの）を大阪の間屋で求め、また一方煙草の茎を何百貫も購入し、これを焼いて灰にし、

水に溶かして濾過し精製液を作る。この両者を反応させ化学変化させた。その結果、一ヶ月後には研究の域を脱して待望の純良品製法の完成をみたのである。早々に気賀の工場を整備して製造を始めると、まだまだ工場の能力に余裕があるので、併せて酢酸、硫酸、酒精エーテル等の製造もおこなった。

だが、稼働してみたら久三郎に届く商品需要は多いのに、生産が追いついていかなかった。これでは量産ができない」

久三郎は工場で働きながらも嘆いていた。原料の苦汁は浜名湖の宇布見塩田と愛知県吉良町の吉田塩田の副産物であったが両塩田は規模が小さく苦汁の産出も乏しく、量産は無理な状態であった。

ある日、市野村塩問屋の池谷孝蔵が阿波から塩を買い付けていることを知り、

「孝蔵さ、わしのところへも阿波から輸送してもらえんかのう」

「塩なら帆船で輸送して商っているから融通できるが、お前のところは塩じゃないだろうに」

孝蔵は不満そうな表情で久三郎に聞き返した。既に事情は知っているようである。

「ようわかつているな。今どうしても苦汁の量が入用なのだ。だめなら塩生産の副産物である硫酸苦土でもいい」

本来は苦汁を仕入れたいが、だめなら代替品でもよいと云うと

「まあ知らない仲ではないし、同郷のよしみで協力する」

池谷は久三郎の商いの役に立つならとしぶしぶ同意した。

だが、代替品の硫酸苦土は季節的な産物で久三郎の期待したほどの入荷ができず量産するには程遠い結果となった。

久三郎は大阪の間屋で取引業者の氏名を記憶していたことがあった。台帳に記載された製造業者の氏名は徳島県板野郡鳴門村の伊藤倉次であった。

一度も会ったことはないが、この業者に直接あたってみることを思いついた。まずは手紙でこれまでの経過と苦渋を連綿と書き続け硫酸マグネシウムの納入を依頼した。金額はとりあえず百円紙幣を同封した。

間もなく伊藤氏の誠意ある返事の手紙とともに、大量の硫酸マグネシウムが届いたのである。光明が見えたような気がした。

名古屋から戻って以来二年の歳月が過ぎ久三郎は二十八歳になっていた。

気賀に整備したバラックの工場も何とか稼働して、生活の一助となっている。

長男鷹吉は四歳になり、きぬへの甘えも少しずつ減ってきた。三人家族の暮らしぶりはこの気賀にも馴染んできている。

明治十二年（一八七六）五月、工場の空き地に鯉のぼりが泳いでいる。三人で見つめながら春の陽気を楽しんでいた。

「きぬ、やつぱり工場をもつと軌道に乗せるためには、大量の苦汁が必要だ」

工場の運営は、同じ働き手である妻には必ず相談する。少しまめなところもあるが、人の意見はひよんなことから発見があるかもしれないという研究者の立場からでもある。

「あなたには今の工場の生産状況が不満なのでしょう。お客さんはいるのに、その希望に添えないというもどかしさかしら」

「そんな悠長なことではない。製品への需要はあっても対応する材料が足りなくて用意できないのだ。いろいろ考えたが、又調査の旅に出ようと思う」

「今度はどこへ行くのですか。それにどのくらいの期間」

「十州塩田を周ってみようと考えている。さて、どのくらいになるだろうか。目的地へ着いた具合で手紙を出すよ」

「十州塩田って、まさか瀬戸内海ではないでしょうね」

きぬは苦虫をつぶしたような顔できつく云った。

久三郎は計画の一部始終を伝えても理解してくれる妻だと信じていた。

十州塩田とは瀬戸内海を取り巻く播磨・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・伊予・讃岐・阿波の十か国の製塩地帯を指す総称である。この地方は天候や干満の差、海岸に入江が多いことで入浜式塩田を作る条件が重なっている。しかも海上輸送ができる。

これらの好条件から製塩行程の中で大量の苦汁が取れるはずだと睨んでいた。

苦汁の主成分は塩化マグネシウムで、当時の使い道は精々豆腐製造の際に凝固剤として用いるぐらい、製塩業者は採塩後の副産物である苦汁を海中へ放棄していたのが現状であった。問題は業者に苦汁の必要性を理解してもらおうことだ。

妻には内緒だが、このとき阿波の撫養塩田地域の伊藤倉次氏には手紙を送り十州踏査のことを書き綴っていた。

月末、念願の十州への調査を始めた。たった一人の旅だが名古屋で研究したときの仲間から得た情報に基づいて、それぞれの地域で協力者を募るつもりである。

まずは播磨、備前、備中と瀬戸内海に添って調査をしていく。

播磨国赤穂は入浜式塩田の歴史が深く、発祥の地と言っても過言ではない。だが、こと苦汁のことになると備前、備中、備後といずれの地も、食塩は採取しても残余の苦汁は利用されず海へ投棄している有様であった。

久三郎はやつとの思いで振り出しに戻り四国に渡ったら、讃岐湯元地方と阿波の撫養地方において、わずかに採取されている。これは粗製潟利塩の製造に使用するためのものであった。

結局調査は現状把握しただけの貧弱な結果で終わってしまった。

それでも調査にあたって協力した香川県高松湯元村の山中伸蔵氏や徳島県撫養浜の伊藤倉次氏を通じて、粗製潟利塩（硫酸マグネシウム）の購入に至ったのである。

半年後、散々な思いで気賀に帰って来た。出迎えた家族の顔には会えた喜びよりも元氣のない父の姿に陰りを隠せなかった。

さらに待っていたのは長期不在が祟り、工場の機械器具の不良と商品需要が遠のいていたことだった。

「お前さん、もう家には経営するだけのお金がありません。食べるのさえも精一杯です」

泣き出さんばかりの顔をしたきぬを見て、久三郎はひと思いに打ちのめされた。さらに悪いことは重なるもので、気賀に帰ってきた早々の十一月四日祖父保五郎が逝去した。享年七十三歳であった。久三郎にとって最も信頼し尊敬してやまぬ化学の師であった。

久三郎の青春時代は、祖父とともにあったといってもいい。その卓越した見識は久三郎の人間形成に大きく影響したはずであった。

数年ぶりで市野の実家に戻り葬儀を済ますと直ちに気賀へ帰ったが、もはや経営は成り立

たず同月には工場を閉鎖し市野へ戻った。

市野の実家は、相変わらず鋳職と鍛冶職の生業で毎日多くの客が出入りして繁盛している。父勘七の地域での好感度が高いせいでもある。おかげで久三郎は気賀での苦勞を少しずつ忘れかけ、新しい研究に取り組み始めていた。きぬは店の裏方で鷹吉の面倒を見ながら甲斐甲斐しく店を手伝っていた。

二年後の十月某日、役場から通知が届く。指定された出頭の日に出向いて戻った久三郎は、夕餉に皆が集まったところで風呂敷を解き、筒の中から一枚の書状を父に手渡した。受け取るなり勘七は驚きと嬉しさを隠せなかった。

「これは製菓免許證だぞ。これがあれば菓屋ができる。一体お前はいつの間に」と目尻を下げた表情で云う父の言葉に家中が喜びの渦に巻き込まれた。

「じい様が生きていれば、どんなに喜んだかも知れないのにな」
勘七は膳を囲んだ皆に免許證を披露した。

久三郎の失墜の日々もこれで報われ、未来に希望が見えた出来事となった。

今、店を切り回しているのは父勘七であるが、祖父保五郎が亡くなった時には、すでに富田家の家督は久三郎が相続をしていた。製菓免許を得たこの日、改めて家長としての自覚を感じていた。久三郎が三十歳の秋であった。

苦汁を大量に算出するためには塩が必要だ。その産地を求めて宇布見から取り寄せた過去があった。他人任せでは到底思うほどの量が集まらなかった。いまは、自分の力で塩業を興すことが最善の策だと肝に命じている。

舞阪は宇布見の真南で浜名湖の最南端にある。自ら塩を作る方法を考案し、ここで実現させよう試みた。しかし、塩価の暴落に遭い本業にも影響が及ぶと考え、やむなく中止せざるを得なくなった。

明治十九年（一八八六）六月二十五日、「日本薬局方」が制定公布され、翌二十年七月施行した。

当時薬局、薬舗において販売を許可された薬品は「日本薬局方」に定められたもののみに限られ、薬品の価格が騰貴し、製薬業者の利益は膨大なものであった。

ちなみに久三郎が製造した炭酸マグネシウム及び硫酸マグネシウムは、後年いずれも日本薬局方に見事合格し

「薬局方に適合したもののうち、国産品は富田の製品のみである」という賛辞を受けた。

ところが翌年二月十七日失火により市野の自宅と隣接の工場を全焼した。すべてが灰になったが、家族に怪我がなかったことは幸いであった。

だが、この惨禍で事業は振り出しに戻ってしまった。いまさら後戻りすることはできない、家族を挙げて復興に全力を尽くした。

その結果、家業が再び元通りになった時、自らの研究を今一歩進めようと考えた。それには苦汁を確実に確保することで、念願の炭酸マグネシウムを量産することであった。

久三郎は、雨が続く日には店先の番台に頬杖を突いたまま外を眺めている。再び家業が軌道に乗ったというのに、きぬは浮かぬ顔をしている夫の肩に手をそっと置き

囁くように云った。

「お前さん、悔しくはないですか。苦汁が集まらないのは誰の所為でもないでしょう」

「そのとおりだ。しかし相手がある」

「時間がたてば、相手だって変わります」

「瀬戸内へ塩田調査に行つて以来八年以上になるが塩業だってやり方が変わっているかもしれないな」

「そうでしょ。だから瀬戸内をもう一度調査するということなら」

「お前は物分かりが早いなあ。要するにそういうことだ」

「梅雨に鬱陶しい顔を見ているのはもうたくさんですよ」

きぬはお道化調子で嘲笑しながら応えた。

それに気を良くしたのか久三郎は

「それじゃあ早速明日にでも出かけるか」

再び十州塩田地帯を踏査する。明治二十一年のことである。

今回の旅はきつと有意義なはずだと期待したが現地へ着いてみると一抹の不安が的中していた。

前に久三郎が踏査に来たときは、苦汁を採取していたのは湯元塩田と徳島県の撫養塩田の一部だけだったが、苦汁の利用は旧態以前で何の進展もなかった。前回同様に踏査にあたり苦汁の採取と廃物利用の抱負を説いてみたが、どこも賛同してもらえなかったのである。

久三郎の踏査は、残る香川県の湯元塩田と徳島県の撫養塩田である。海岸線での製塩業者の現状からは到底期待が持てなかった。

やはり、湯元浜では「ツボガリ」と称し、撫養浜では「アラセイ」と云つて前回同様の粗

製潟利塩を製造販売していたに過ぎなかった。

もはや万事休す。久三郎は踏査の途中で肩を落としてしまった。

だが、それでも撫養塩田の伊藤倉次ら三氏からは久三郎の熱意に励ましとそれぞれ協力を約束してくれた。

旅の最後の日は讃岐に逗留すると決めていた。早朝、宿を出て金毘羅宮にお礼参りして二か月ぶりに市野村に戻った。

村へ帰ってからの久三郎は、暑い最中でも書き物をして、しきりに将来計画を練っていた。

「あなた、どうしたのですか。まるで人が変わったみたい」

きぬはいつもなら「お前さん」と呼ぶのに、この日は「あなた」になっている。

「どこも変わっていないよ。お前のほうが変だ。わしが留守の間に何かあったのかい」

久三郎はきぬに聞き返すと、薄ら笑いを浮かべながら

「別に何もありません。でも留守の間にいろんな方が訪ねてきたので、つい言葉使いが変わってしまっただけです」

日本薬局方の施行以来、富田薬舗への取引の申入れが増えてきていた。きぬは嬉しさを隠せないらしい。

それにいつもの久三郎は工場に行つて製薬の研究と器具の稼働をしているはずである。

踏査が終えてからの夫は妻には少し異常に見えたのかもしれない。普段手にしない筆で手紙を書き、図や計画書のようなものを作っている。作業中はむやみと喋らなくなっていた。

久三郎は十州塩田踏査の結果、紹介された徳島県撫養町北浜の多田半兵衛から苦汁を原料とするツボガリ五十俵を購入し、従来の方法で潟利塩（硫酸マグネシウム）の製造を試みていた。だが、いっこうに結晶をみなかった。

このツボガリは徳島県撫養港から帆船で海路を輸送して豊橋港で陸揚げし、それより陸路をとって市野村まで輸送された。まさに大かかるといつてもよい仕入れである。

ところが研究を重ねた挙句の結晶方法は、少量の結晶体を得ることはできたが結晶粒は潟利塩とは全く異なるものであった。

久三郎は両手を挙げて腹の底から叫び声を発した。

「失敗だあ。大損をしてしまった」

頭を抱えままその場に座り込んでしまった。しばらくして平静に戻り気を取り直した。

「さてよ、この結晶が潟利塩でないとすると、いったいこの結晶体の正体は何なんだ」

さらに、結晶体の性質を究明してみると塩化カリウムであることが判明した。また、この原料ツボガリは人口カーナライトであることがわかった。

久三郎の研究結果は、苦汁からカリ塩類を製造することが可能だと断定したが、製造コストや販路などの諸条件を考えると、直ちに販売するのは差し控えた。

この日工場から出てきた久三郎の様子がおかしい。両手が震え笑っているようだが、眼は宙を泳いでいる。

きぬは心配になって久三郎に声を掛けてみたが、夫の説明は意味不明で要領を得ない。その晩、家族はご機嫌の夫に振り回されていただけであった。

きぬはこの日の夫に何が起こっていたのか後で知ることになる。

年が明け明治二十三年（一八九〇）二月、久三郎は静岡県で初めて実施された内務省薬舗開業試験に合格し二月には薬剤師免許の交付を受け市野村で薬局を開業した。薬舗兼製薬工場の運営は順調で炭酸マグネシウムの需要の増加に伴い、事業を拡張し雇う職工も増えていった。

さらに昨年の研究結果は、失敗どころかわが国で初めて苦汁中の塩化カリウムの分離製造に成功したと業会で絶賛され、学界においても高く評価された。

同年八月、東京医科大学教授下山順一郎薬学博士が東京大学の学生を引率してこの市野村の工場視察に来る。

「製品は純良です」

下山博士は賞賛し、工場の全製品を東京帝国大学の薬学教室に模範標本として備え付けられることになった。

久三郎はこの時、下山博士に国内の製塩業の実態を語り、自己の抱負を詳しく述べた。

「苦汁確保のため十州塩田地方へ工場を新設する計画であり、近日再度適地確認のため調査を実施します」

と打ち明けた。これに対し下山博士からは

「邦家のためにもまことに喜ばしいことである。健康に留意して折角努力を望みます」
との心からの激励の言葉をいただいた。

この様子を戸口の陰で聞いていたきぬの眼からは、思わず熱い涙が頬を伝って流れ落ちていた。

こうして、同博士の励ましを受けた久三郎の決心は、ますます強固に不退転のものとなっ

たのだった。

翌年初春、久三郎はきぬに家族で気賀に行こうと持ち掛けた。

久三郎の移転の意思は変わらない。この三月には家族揃って阿波の鳴門へ旅立つ予定である。

家族三人は気賀での思い出の地を訪れ、郷里に最後の別れとしたかったのである。

かつてバラックの工場で研究に没頭した海岸を巡り、次いで気賀の雑木林を抜け低山の中腹に立った。帰路は三人で一気に下ろうと話が弾み、足を滑らせぬよう手を繋ぎあい下り始めた。すると、きぬが立ち止まり一本の木の枝を指している。

「お前さん、きれいな花ね。いい香りがする。まるでかんざしみたい」

それは球状になった淡黄色の花の塊である。久三郎は妻に相槌を打ちながら

「これはくろもじの花だよ。じい様が営んでいた市野の鋸屋では、この花のような金銀のかんざしを作っては売っていた。父もわしも作るのを手伝った。それにこの花は今のお前だよ。木は薬の研究に関わる資金づくり、どちらも気賀での生活を支えてきた立役者さ」

思いを込めて話した。そばで十六歳になった長男鷹吉がくろもじの幹に触れながら、反り返りながら自慢そうに云う。

「倭訓栞には樹色黒く、実も黒し、よってこの名がある。延喜式の卯杖に使われた黒木であろう。つまり富田薬舗が今あるのは何かの呪術によって導かれたということですか」

「呪具に使われたというのはどうなのかな。くろもじの木こそが、わしらの人生に苦難と光明を与えてくれたのだ」

三人が木の下で佇んでいると、一羽のトンビが大きな輪を描いて青空高く舞い上がっている。その遙か先には浜名湖が一望でき春の陽を浴びて煌めいていた。

昭和二年（一九二七）五月八日夜半、鳴門撫養港で七十三歳になる富田久三郎を乗せた鶴羽丸は、鏡のごとき海上を滑るがごとく多数の歓呼のうちに出港した。神戸で長井長義博士ら一行と合流し、西欧視察の旅に出発するのであった。

（完）